書評

編：国立がん研究センター内科レジデント

がん診療レジデントマニュアル　第5版

評　者：佐藤　温（昭和大学准教授・腫瘍内科学）

『がん診療レジデントマニュアル』も第5版となった．初版から既に13年を数え，とても息の長い本である．いかにがん診療医に必要とされつづけている本であるかがうかがえる．私の仕事部屋の本棚にも初版から全版が揃えられている．各版の表紙の色が異なることもあり（徐々に厚くもなっている），並べると案外きれいなものである．マニア心をくすぐるのでプレミアでも付かないかなぁなどと不謹慎なことまで考えてしまう．実は大変お世話になっているので捨てられないのである．がん薬物療法を診療の主とする医師にとっては，複雑で解釈しにくいこの領域における実臨床的な内容が，非常にわかりやすく整理されているため，初めに目を通す本としては最適である．

第3版までは，常に白衣のポケットに入れて，日常診療にあたっていた．治療方針がわからない症例に出会うとすぐ調べた．治療計画を立てて再び内容を確認した．症例を検討するときにも本マニュアルを開きながら議論した．第4版は，地方での学会会期中が発売日であったため，発表に来ていた医局員とわざわざ医学専門書を取り扱う書店を探して，発売日当日に購入した．まるで，人気ゲームソフトの販売みたいである．さらに，第4版は2冊所有している．別にほかからプレゼントされたわけではない．自分のポケットから支払って購入している．実は，このとき私は，臨床腫瘍学会のがん薬物療法専門医の試験を受けるため，このマニュアルを試験合格に向けて覚えるべき知識を整理するために使用していたのである．まるで学生時代のように赤線をたくさん引いているうちに，真っ赤になってしまい，日頃の臨床時に調べにくくなってしまったので追加1冊購入した次第である．結論から言えば，がん薬物療法専門医を受けようとしている医師にも，ぜひお薦めしたい．膨大な知識をこれだけコンパクトにまとめている本はない．本書を読んでから，臨床腫瘍学会の教育セミナーを聴くと，理解しにくい自身の専門外の領域のがんの知識がよく頭に入る．また，携帯可能であることも大きい．この件については後述でその意味を追加する．自分勝手な話ばかりでなく，書評として本来の意義である内容について触れる．

本書の特徴は，肺がん，乳がん，胃がん，食道がん，大腸がん，肝胆膵がん，といった5大がんをはじめとする一般的ながんはもちろん，婦人科がん，泌尿器，造血器，骨盤軟部腫瘍，皮膚，頭頸部，脳腫瘍そして原発不明がんに至るすべての臓器がんの疫学，診断，臨床症状，病理分類，Staging，予後とともに治療方法が簡潔明瞭に記載されている．また，推奨される薬物療法のレジメンは具体的に投与方法が見やすいように表わされ，かつすぐにオリジナルの論文に当たれるように文献も一緒に記載されている．さらに，この本の特徴であるが，治療法に関する信頼度を★印で表現（3段階）していることにより，EBMの理解に大いに役立つようになっている．そして，版を重ねるようになってから，各論以外の，インフォームド・コンセント，薬物療法の基本概念，臨床試験，さらに副作用対策や合併症等についての内容が充実してきている．がん告知はコミュニケーションスキルに変わっているなど，その時代背景もよく反映している．つい，読み飛ばしてしまうこれらの総論的内容がかなり充実しているのである．この部分については，日頃病棟や，診療室で目を通すのではなく，単行本の小説を読むがごとくに読んでいただきたい．大きさもポケットサイズであり，病院との行き帰りの移動時間に読むこともできるのである．もちろん，医師に限らず，医師以外の医療者にも同様に役立つはずである．ぜひ皆さん，購入されることをお勧めする．

●B6変型　頁504　2010年
定価4,200円
（本体4,000円＋税5%）
[ISBN978-4-260-01018-4]
医学書院刊

©IGAKU-SHOIN Ltd. 2011